

## 統計報告書における数値の3桁区切り

## 1 はじめに

筆者が統計局で統計調査結果の公表を担当していた平成一桁の時代には数値を3桁ごとに空白（スペース）によって区切ることが慣例とされていました。当時は、統計表の見やすさからそのようにしているものと想像していました。

そんなある日、某学識経験者から、いろいろな人を經由して3桁ごとに空白（スペース）を3桁ごとにカンマに変更することの提案をいただきました。その理由は、3桁ごとに空白（スペース）で区切られていると報告書をスキャナーで判読するときに支障があるというものでした。統計局では、これに対応しつつ、統計ユーザーの利便性の向上の観点から、統計表を表計算ソフトやデータベース形式で提供することの検討が進められました。当時、旧統計法では、指定統計調査<sup>1</sup>の結果の公表は官報又は官報以外の刊行物、刊行物に掲載されない統計表を閲覧に供する方法により行われ、インターネットで一部の統計情報の提供（公表行為でないカタチ）が徐々に開始された頃でした。現行の統計法では、インターネットによる公表も認められ、これが主流となりました。隔世の感があります。

これに関連して、本稿では統計報告書における数値の3桁区切りのルールなどについて調べてみましたので、紹介します。

## 2 国際標準は？

1948年の第9回国際度量衡総会で決定された決議7により、国際単位系(SI単位系)<sup>2</sup>の日本語版では、「桁数の多い数字を表記する際は、読み易くするために、3桁ごとに空白を空けてもよいことになった。この3桁ごとのグループの間に点やカンマは挿入しない。…」<sup>3</sup>とされています。

## 3 我が国の公用文における数値の3桁区切りのルール

我が国では、公用文において数字に3桁ごとにカンマ（コンマ）で区切ることとされ、これについては、公用文作成の要領

（昭和27年<sup>1952</sup>年4月4日付け内閣閣甲第16号内閣官房長官発各省庁次官宛て依命通知「公用文改善の趣旨徹底について」の別紙）が根拠とされています。

○公用文作成の要領（昭和27年）（抜粋）

第3書き方について

執務能率を増進する目的をもって、書類の書き方について、次のことを実行する。

3 左横書きの場合は、特別の場合を除き、アラビア数字を使用する。

注1. 横書きの文書の中でも「一般に、一部分、一間（ひとま）、三月（みつき）」のような場合には漢字を用いる。「100億、30万円」のような場合には、億・万を漢字で書くが、千・百は、たとえば「5千」「3百」としないで、「5,000」「300」と書く。

注2. （略）

注3. 大きな数は、「5,000」「62,250円」のように三けたごとにコンマでくぎる。

## 【参考1】

日本における西洋簿記学の最初の文献は「帳合之法」<sup>4</sup>（明治6年）であるとされ、その中で、数値の3桁区切りについても紹介されています。訳者は福沢諭吉です。西洋の3桁区切りは、慣れれば「日本流」の記し方よりも遥かに便利であるとする福沢のコメントも盛り込まれています。福沢諭吉は、「日本流」にこだわらなかったと考えられます。

## ●「帳合之法 初編」(抜粋)

(筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点を付しました。)

・・・金の高を書くに何千何百何十と記さずして一より九までの数字を用ひ、其数字の位を見て金高を知ること恰（あたかも）算盤の桁を見るが如し。左に其一例を示す。

一二三、四五〇、〇〇〇 は 十二万三千四百五十円 なり

一二、三四五、〇〇〇 は 一万二千三百四十五円 なり

一、二三四、五〇〇 は 千二百三十四円五十銭 なり

一二三、四五〇 は 百二十三円四十五銭 なり

一二、三四五 は 十二円三十四銭五厘 なり

(注1；原文で「円の位と銭の位を明に分つため横に線を引けり」とあることから：下線を筆者が付記)

右の如く同じ数字にても其位に出て十倍づゝの高下あるなり。多く数字の重なるときは三字毎に「、」の点を打て百と千と、十万と百万との位を分つ。本文には円の位と銭の位を明に分つため横に線を引けり。或は品物一つの価、何円何銭替と云ふ処に線を用ひずして、譬（たと）へば圓一二、七五セズと記したるは十二円七十五銭替の印なり。此数字の用法は初学に不適當のやうなれども決して然らず。訳者も最初は自から紛らはしく思ひ、折節位を誤ることもありしが五六枚翻訳する内に直に之に慣れ、日本流に金の高を記すよりも遙に便利なるを覚へたることなれば、誰にても四五日の熟練にて容易に出来ることなる可し。

(注2；黄色のマーカー部分は、筆者の老眼では画像から判読できなかったため、「福澤全集 巻三」を引用。)

<sup>1</sup> 旧統計法第2条により制度所管大臣が指定した統計を作成するための調査（国勢調査、労働力調査、小売物価統計調査等）

<sup>2</sup> 【参考資料】国立研究開発法人産業技術総合研究所（計量標準総合センター）のサイトによる。

<https://unit.aist.go.jp/nmii/info/redefinition/>

<sup>3</sup> 【参考】英語版：「for numbers with many digits the digits may be divided into groups of three by a space, in order to facilitate reading. Neither dots nor commas are inserted in the spaces between groups of three.」（前掲の計量標準総合センター）のサイトによる）

<sup>4</sup> 日本における西洋簿記学の最初の文献（明治6年<sup>1873</sup>年出版）。アメリカで商業学校を経営していたブライヤントおよびストラットン共著の教科書「Bryant and Stratton, Common School, Book-keeping」を福沢諭吉が翻訳したもの。福沢は「Book-keeping」（簿記）を「帳合」と訳しています。（【参考資料】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション）

●「帳合之法 初編」の画像（抜粋） ←



←表紙

【画像】国立国会図書館デジタルコレクション

【参考2】

菊池大麓<sup>5</sup>は、千進法 (thousand、million、billion…) を用いる西洋のように3桁区切りを用いず、万進法 (万、億、兆…) を用いる本邦においては4桁区切りを用いるべきであると主張しました。これを踏まえ、東京統計協会は、統計集誌第5号 (明治15年<sup>1882年</sup>2月) から、それまでの3桁区切りから万位に「、」を付す4桁区切りに変更しました。<sup>6</sup>

菊池大麓の4桁区切りを主張する論文「句点位置改正」は、統計集誌第30号 (明治17年) に掲載されています。

ちなみに、昭和14年 (1939年) 1月から昭和22年1月終まで統計局のトップを勤めた川島孝彦局長も4桁区切りを主張<sup>7</sup>したことがあったようです。千進法の欧米では数値の3桁区切りはなじむかもしれませんが、万進法の我が国には数値の4桁区切りの方がなじむと考えたのかもしれませんが。

【余談】

昭和21 (1946) 年3月・文部省教科書局調査課国語調査室 (原文縦書き) の「くぎり符号の使ひ方 案」(文化庁HP) において、テン「、」の使い方に「数字の位取りにうつ (例40 41 42)。」があるとして、その附記で「現行の簿記法では例40 41のごとくうつが、わが国の計数法によれば、例41は42のごとくうつのが自然である。」としています。

- 例40 一、二三五  
41 一、二三四、五六七、八九〇  
億 万  
42 一二、三四五六、七八九〇

【参考3】

国勢調査報告など統計局所管の統計調査の報告書は、調べた範囲では、いずれも3桁区切りとされていました。国際比較を重視したものではないかと考えられます。ただ、3桁区切りの方法は、一律ではありません。例えば、国勢調査報告における人口や世帯数の数値では、次の表のようになっています。

表 国勢調査報告における数値の3桁区切りの方法

国勢調査報告の年次	3桁区切りの方法
平成12年 <sup>2000年</sup> ～平成27年 <sup>2015年</sup>	3桁カンマ
昭和25年 <sup>1950年</sup> ～平成7年 <sup>1995年</sup>	3桁スペース
昭和22年 <sup>1947年</sup>	3桁カンマ
昭和15年 <sup>1940年</sup>	3桁スペース
大正9年 <sup>1920年</sup> ～昭和10年 <sup>1935年</sup>	3桁カンマ

【注】：政府統計の総合窓口(e-Stat)では、国勢調査について、昭和55年<sup>1980年</sup>以降の結果から機械判読可能なカタチでも提供しています。同年以前の結果はPDF形式でも提供しています。

【参考4】

国連の「Statistical Yearbook 2020」のサイトでは、多くの統計表がPDF形式とCSV形式で提供されています。PDF形式の統計表の数値はスペースによる3桁区切りで表記し、併せてCSV形式の統計表も提供することにより機械判読を可能にしています。

4 雑感

昔、ある人のスピーチで、人間には、①考えてから走る人、②走りながら考える人、③走ったあと考える人の3タイプあるという話を聞いたことがあります。筆者は、手探りと気合いで走ったあと考える③型に該当すると思います。今回の3桁区切りについての調べもので、3桁区切りのスペースは、そうだったのかと、四半世紀前に走ったことを静かに考える機会を与えていただくことになりました。そして、更に統計ユーザーの利便性を図ることとはどういうことなのかを考える機会も筆者に付与することとなりました。

最近では、政府統計の総合窓口 (e-Stat) において、機械判読可能なデータの表記方法に基づく統計表の提供が可能となるなどユーザーの利便性の更なる向上が期待されます。ただ、統計を正しく利用する上で、品質表示を疎かにすることは許されないと改めて認識しました。

【参考】令和2年 (2020年) 12月18日に総務省統計局・政策統括官 (統計基準担当) が策定した「統計表における機械判読可能なデータの表記方法の統一ルール」によれば「ヒトが見やすくするための工夫として、千円単位を示す「、(カンマ)」を文字列として直接入力している場合、関数によっては正確に計算できない場合があるほか、当該 Excel ファイルを csv 化すると思わぬ挙動を示す場合がある (csv はカンマでデータを区切るため)。そのため、数値データは数値属性とし、文字列を含まないこと。」とされています。

<sup>5</sup> 菊池大麓 (きくち だいろうく) (1855～1917)：数学者・教育行政官。洋学者箕作秋坪 (旧姓菊池) の二男。幕末・明治初期に、2度イギリスに留学し、ケンブリッジ大学で数学・物理学を学ぶ。明治10年 (1877) 帰朝後、東京大学教授となる。21年理学博士。23年貴族院議員に勅選。文部省専門学務局長、文部次官を経て、31年東京帝国大学総長。34年第1次桂内閣の文相となる。35年男爵。41年京都帝国大学総長。その後帝国学士院長、枢密顧問官。大正6年 (1917) 初代理化学研究所長。(【出典】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」)

<sup>6</sup> 【参考資料】伊藤廣一「統計数字4けた区切り論」(日本統計協会「統計」1996年5月号所収)

<sup>7</sup> 【参考資料】「(川島孝彦氏追悼座談会) 川島先生の人と業績」(日本統計協会「統計」1958年5月号所収)